

Reprinted by Permission of
Good Bird™ Magazine
Vol 4-4; Winter 2008
www.goodbirdinc.com

WHAT'S WRONG WITH THIS PICTURE? EFFECTIVENESS IS NOT ENOUGH.
これのどこに間違いが？ 効果的というだけでは十分ではない

Susan G. Friedman, Ph. D.
Department of Psychology
Utah State University, Logan, UT
(日本語訳: 石綿美香)

患者を扱う際の心得は二つ。助けよ。さもなくば傷つけるな。 ヒポクラテス

ヒポクラテスのシンプルな理想の中で表現されている多くの重要な側面の中で、もっとも重要であるもののひとつは普遍性です。まさに倫理的原則は医師と同じように世話をする人にもあてはまり、それは病気と問題行動、そして人とインコということになります。しかし手助けと傷つけることの二分が最初に現れるという事は、動物の行動を変えるために用いられる手法がやっかいな問題にもなりえるという事です。

これのどこに間違いが？

残念なことに、問題行動への対応として、鳥が噛みついたことにより棒で床に押しつけられたり、手に乗らないことで食べ物や社会的な関わりを取り上げられたり、長く泣き叫んでいるからと冷たい水のシャワーを浴びせられたりといった方法を耳にしない時はありません。ありがたいことに、ほとんどの人が問題なく、これらは身体的な虐待であり不適切な方法であると判断します。しかし、以下のインコの問題行動解決へのよくある提案について考えてみてください。

- * 鳥が噛んだら、床に落とす
- * 鳥がケージから出てくるのを拒んだら、タオルか手袋をしてつかむ
- * 鳥がうるさい場合、ケージにカバーをするか羽ばたいて息がきれるまで手の上で揺らす
- * 食器棚を鳥が噛んでいたら、水をかけるかフライパンをスプーンでたたく
- * ステップアップを拒んだら、疲れ果てるまで梯子をのぼるように手を交互に繰り返す

こういったことは、その不適切性を判断するのが難しいかもしれませんが、なぜなら世話をする人達に長きにわたってよく勧められてきた方法だからです。推奨している人々は、こういった方法が問

題行動を減らすのに効果的だということに基づいて勧め続けるのです。肩をすくめてこう言うでしょう「効果があるならね!」。議論の余地はなく、これらのアプローチは時にはうまくいきます。(まさしく、たまに効き目があるというだけで、使い続けるようになるのに十分です。これはギャンブルをやめられない場合のときおり出るジャックポットと同じことです)。しかし、根底にある効果的という部分のほうが、はるかに大きな問題です。私たちが用いる問題行動を減らす手順についての判断と選択のための適切な基準が欠けています。効果的というのはひとつの基準であるけれど、効果的であることだけでは十分ではありません。

干渉的であることと社会的容認性

行動を減らす手順を、私たちが選ぶための手助けとなる基準が欠けていることが深刻な問題です。こういった基準なしでは、十分人道的であるかどうかを考慮せず効果的であるということだけで介入してしまいがちです。最大限に人道的であるために、私たちによる介入は学習者にとって非侵襲的であり、かつできるだけ効果的であるべきです。Carter and Wheeler は侵襲的というのを二つの重要な基準で定義しています。1) 介入の社会的容認性のレベル 2) 介入が効果的である中でも、学習者がどの程度制御を維持しているか

行動を変える手順の社会的容認性については、特定の問題と動物にとって何が適切で理にかなっているかという個人の判断になります。行動介入の容認性に関する研究によれば、教師、心理学者、親、子供は、罰に基づいた手順より正の強化に基づいた手順のほうが容認できると、一貫して評価していることがわかります。既知の罰に基づいた手順の副作用が、こういった判断を後押ししています。副作用とは、増大する攻撃性、般化される恐怖、無関心、逃避/回避行動を含み、すべてのコンパニオン動物によく見られるものです。世話をしている動物がこういった行動をしているのであれば、私たちのよくしてあげたいという意向人との生活に苦痛を感じていることのあらわれかもしれません。他にも罰に基づいた手順でおきる問題はあり慎重に考えなければなりません。

- * 罰は学習者に問題行動のかわりに何をすべきかを教えない
- * 罰は世話をする人に、どうやってかわりの行動を教えるのかを教えない
- * 罰は実は 2 つの嫌悪刺激をとまなう出来事 — 罰となる刺激の始まりとそれまで問題行動を維持していた強化子の没収
- * 罰は、最初のレベルの行動の減少を維持するために、嫌悪刺激の増加が必要になってくる
- * 効果的な罰は、罰を与える人を強化し、その人は将来再び罰を用いやすくなる。たとえ先行事象の整備と正の強化が同じ程度またはそれ以上に効果的であったとしても

干渉的であることと学習者による制御

行動を減らす手順がどの程度まで学習者に制御を残すかという Carter and Wheel の基準の 2 番

目が、人道的で効果的な方法の基準を作り上げるのに不可欠です。すべての動物たちが可能な限り、かれらの生活の中の重要な出来事を制御するために行動する権利を与えるべきだと研究により実証されています。。つまりそれは望む結果を達成するために行動を効果的に使うということです。まさしく、それをするために行動は進化したのです。嫌悪刺激から逃れようとする動物の試みが妨げられると、逃げる力が残っていたとしても諦めてしまう傾向があります。この現象は、学習性無力感と呼ばれており、広い種類の動物種(犬、猫、サル、ゴキブリ、子供、人間の大人)にみられます。反応阻止は、うつ、学習障害、情緒の問題や免疫システムの活動抑制などのさらなる病的作用とも関連づけられています。

インコの噛みつきを無視したり、ケージへの出入りを強要したり、強制的に手に乗せたり下ろしたりするたびに、インコの機能的行動は効果をなくします。「そのうち馴れるよ」という論理的根拠のもとに、恐怖を引き起こすおもちゃと共にインコをケージに閉じ込めておくことでさえ、逃げられないことでインコに不必要な無力さを感じさせてしまいます。制御の欠如が生活そのものになってしまうと、過剰な叫び声、毛引き、自咬症、ペアの鳥殺し、恐怖症などの異常行動をするようになってしまうかもしれません。

干渉のヒエラルキー

応用行動分析学の分野において、40年に渡りもっともポジティブでもっとも干渉的でない行動を減らす手順の基準(最も制約の少ない行動介入 LRBI として知られる)があります。この基準は子供を守る連邦法(IDEA 1997)と Guidelines for Responsible Conduct for Behavior Analysts (Behavior Analyst Certification Board, 2004)に支持されています。この連邦とプロフェッショナルの基準によれば、嫌悪刺激を伴う手順はより干渉的なので、そういった要素が少ないものを試した後にのみ勧められるとされています。

この判断を手助けにするため、アルバートとトルートマンが行動を減らすための手順の選択肢ヒエラルキーを表しました。頂点にあるのがレベル1の手順(さまざまな代替行動の分化強化)で、もっとも社会的に容認され、学習者の制御が最も高い程度で維持されると考えられています。ヒエラルキーのもっとも下にあるのが、レベル4の手順はもっとも社会的に容認性が低く、学習者の制御ももっとも少ないとされています(正の弱化学手順)。

「効果的であれば十分か？」という質問に戻ると、子供への行動的介入を選ぶにあたっては、答えはあきらかに「NO!」です。同じような介入のヒエラルキーが、倫理的で実行しやすいという点からも、飼育下にある動物と彼らの世話をする人達、そして問題行動解決のために努力しているプロフェッショナル達すべてにとって最善の利益となるのは確実です。もっとも干渉的でない効果的な手順(正の強化を選ぶこととエンパワー)により、学習の目的を妥協することなく、介入の際の人道的レベルをあげるのです。

教師のためのアルバートとトルートマンのヒエラルキーをさらに詳しく述べます。図 1 は離れたものと直前の先行事象の整備を考慮した介入計画の推奨されるヒエラルキーです。大多数の問題行動は、レベル 1-4(離れたものと直前の先行事象の整備、正の強化と代替行動の分化強化)で示されている計画のひとつまたはそれ以上で、防ぐか解決することができます。レベル 5(消去、負の強化、負の弱化、順番はとくになし)は、ある環境においては、ときに倫理的で効果的な選択肢になります。レベル 6、正の弱化(その行動が起きる可能性を減らすために嫌悪刺激を用いること)は、必須である行動の知識と教えるスキルを持っていれば、ほとんど必要ありません(最善の方法の基準として勧められることもありません)

<p>レベル1</p> <p>離れた先行事象 - 医療、栄養、身体の変更を変える</p> <p>例：毛引きを解決する。飲み込んでしまった金属を外科的に取り除く。食事の質をあげる。自然木の止まり木や紙のアイテムをケージに入れる。刺激的な活動やエクササイズを増やす</p>
<p>レベル2</p> <p>直前の先行事象 - 問題行動が起きる出来事の設定を変える、動機を変える、弁別刺激(キュー)を加えたり、取り除いたりする</p> <p>例：噛みつきを防ぐためプレイジムを窓枠から離す。インコのうろつきを減らすため、プレイジムに置いていく前に 1 対 1 の集中した時間を作る。取られる事を減らすために鳥と関わる前にイヤリングをはずす。</p>
<p>レベル3</p> <p>正の強化 - 正しい行動がおきる可能性を増やすため、問題行動よりも強化される結果を付随的におこす</p> <p>例：世話をする人が「クレート！」と言った時(A)、インコがクレートに入った(B)ら、世話をする人が褒めてご褒美をあげる(C)。クレートに入ることが増えるでしょう。</p>
<p>レベル4</p> <p>代替行動の分化強化 - 許容できる代わりとなる行動を強化し、問題行動の強化子の維持をやめる</p> <p>例：世話をする人が部屋に入ってきた時(A)、もし鳥が止まり木に両足を乗せていたら(B)、世話をする人が褒めて頭をなでる。世話をする人が部屋に入ってきた時(A)、もし鳥が激しく前後に揺れていたら(B)、世話をする人は鳥を無視する。止まり木に両足を乗せていることが増えて、揺れは減っていくでしょう。</p>

レベル5（侵入的なものの順番を意図して並べているわけではない）

a 負の弱化 - 問題行動が起きる可能性を減らすためポジティブな強化子を付随的に取り去る
例：世話をする人がシードのカップを設置する(A)、もしインコがケージのバーを噛んだら(B)、世話をする人がシードカップを5秒間取り去る(C)。ケージのバーを噛むことが減っていくでしょう

b 負の強化 - 正しい行動が起きる可能性を増やすため嫌悪刺激である先行刺激を付随的に取り去る

例：世話をする人が手を差し出す、もう片方の手にはタオルを持っている(A)、もしインコがステップアップをしたら(B)、タオルを取り去る(C)。ステップアップすることが増えるでしょう

c 消去 - 行動を抑制する、またはベースラインのレベルまで減らすために維持していた強化子を永遠に取り去る

例：子供の助けを借りて、注目を集めるためのインコによる悪い言葉を無視してもらおう。悪い言葉は減るでしょう

レベル6

正の弱化 問題行動の起こる可能性を減らすために嫌悪刺激となる結果を付随的に起こす

例：世話をする人が鳥を手に乗せてドアを通り過ぎる(A)、もしインコが噛んだら(B)、世話をする人は手を激しく揺らしてインコを床に落とす(C) 噛みつきは減るでしょう。

図 1 もっともポジティブかつ侵入的ではない、効果的な基準を用いて行動を変える手順の推奨されるヒエラルキー(レベル 1 もっとも推奨される — レベル 6 もっとも勧められない)

行動のコンサルティングをするプロフェッショナルのために

ベイリーとバーチによると行動分析が独特なのは、動物の行動に関する仕事をしているプロたちにも適切だということです。行動分析学者も動物行動コンサルタントも行動介入のプランを実行するだれかを指導しています。たとえば専門職の助手や世話をする人達です。行動介入は、コンサルタントのオフィスではなく、通常実際にその問題行動が起きている場所で実行されます。参加しているものはしばしば弱く、傷つくことから自分を守ることができません。この類似点、そして下にあげたその他のことは、行動分析学者のために作られた倫理的な基準が、さまざまな種の動物とかわる行動コンサルタントにも適切で広まったということです。たとえば、以下の行動分析学者の基準はすべての行動に関わるプロフェッショナル達に望ましいもののようです。

*参加者の幸福を常に守る

- * 個々のために作られた介入計画を用いる
- * 問題行動の機能的診断をもとにした介入計画を作る
- * 科学的なベースがある手順を用いる(実証ベースの対処)
- * 介入を行い評価するために科学的なメソッドを用いる(介入が終わるまで介入前のベースラインとなるデータと現在進行中の対処データを集める)

結論

行動を変える介入を選択し応用する時には、効果的だけでは十分ではありません。人間の学習者に用いられる応用行動分析学の分野から拝借した詳しい手順のヒエラルキーにより効果的につぐ基準、相対的な侵入性というものが足されます。この倫理的な基準なしでは、介入は利便性、馴染みかどうか、スピード、権威に対する盲従に基づいて選択されることになり、うっかりと動物に罰による有害な副作用や学習性無力感を与えてしまうかもしれません。もっともポジティブかつ侵入的ではない効果的な介入を確実にし、行動する前に私達が考えることで、行動のゴールを達成する手段を選ぶことができます。このように、私たちは効果的で人道的になれるのです。これが私たちが飼育以下の動物達と世話をする人達の幸せのための最低基準のケアなのです。

Author's Note: Gratitude is sincerely extended to the extraordinary volunteers on the Parrot Behavior Analysis Solutions (PBAS) Administration and Threadleader's contributions to this article; and to the North American Veterinary Conference for the opportunity to present an earlier version of this paper, January 2009.

References

1. Carter, SL, Wheeler, JJ. Considering the intrusiveness of interventions. *The International Journal of Special Education*; 2005,20,132-142.
2. Elliot, SN. Acceptability of behavioral treatments: A review of variables that influence treatment selection. *Professional Psychology: Research and Practice*; 1988. 19. 68-80.
3. Miltenberger, R. Assessment of treatment acceptability: A review of the literature. *Topics in Early Childhood Special Education*; 1990. 10. 24-38.
4. Maier, SF, Seligman, MEP. Learned Helplessness: Theory and evidence. *Journal of Experimental Psychology: General*; 1976 105, 3-46.
5. Laudenslager, ML, Ryan, SM, Drugan, RC, Hyson, RL. Coping and immunosuppression: Inescapable but not escapable shock suppresses lymphocyte proliferation. *Science*; 1983. 221, 568-570
6. Alberto, PA, Troutman, AC. *Applied Behavior Analysis for Teachers* (6th ed.). Upper Saddle River, NJ: Merryll Prentice Hall; 1999.
7. Bailey JS, Burch MR. *Ethics for Behavior Analysts*. Mahwah, NJ: LEA; 2005.